

「大学史」講義 まとめとして

佃 隆一郎

〈大学史事務室〉

「大学史」リレー講義開設にあたり、実質上のコーディネーター役となった私は、単独で最初と最後の講義（2006年9月22日および2007年1月12日）を担当したが、このシンポジウムでは最後の講義「まとめとして」のみが報告の対象となった¹⁾。そこでシンポの席では、最終講義に加えて同日実施の「講義アンケート」や2週間後（1月26日）実施の単位認定試験（会場での筆記式）の形式・結果も報告してみた。よって、ここではシンポで作製、使用したレジュメをもとに、2006年度の「大学史」最終講義とアンケート、そして試験について以下順に述べることにする。

なお、同年度の同講義の構成・受講者などについては、この報告集の冒頭にある拙文を参照されたい。

最終講義および講義アンケート（2007. 1.12 実施）について

当日の講義は「一連のリレー講義後半の『愛知大学史』の復習とまとめ」を主眼に、新規に作製したレジュメに基づいて、行なった。

そのレジュメは、以前に武田信照学長が講演会用に作製（「大学史」講義での学長の担当回でも使用）されたまとめ形式のレジュメ「愛知大学の60年」を土台に、当時設営中であった大学史新展示室（2007年4月豊橋校舎大学記念館内にオープン）のパネル説明文用に作製していた原稿を加えて構成した²⁾。その「説明文原稿」は、「旧

制愛知大学の誕生」「学部・学科の新増設」「『中日大辞典』の編さん」「中国との交流」「愛知大学事件」「山岳部薬師岳遭難事故」「愛知大学での学園紛争」「名古屋新校舎開設と車道校舎再開発」の各文（500～600字ずつ）である。

むろん、学長のレジュメとまた同じようなものにしてはならないため、そこでは十分にふれられていなかった箇所を補うことによって、（受講生から見ての）差別化を図ることにしたが、ここで補い、さらには個人的に強調してみたことは、「愛知大学創立までの経緯」として、「施設としての“前身”」のことにした。

すなわち、愛知大学が豊橋市に創立された際に、大学施設として転活用された旧陸軍施設の変遷について、旧陸軍第十五師団の進駐による一大施設の建設（1908年）、軍縮による十五師団の廃止（1925年）後“空き家状態”のまま陸軍敷地として存置されたこと、その一部が陸軍教導学校に転用されて（1927年）さらにほぼ全部が陸軍予備士官学校になり（1940年）敗戦による陸軍解体まで続いたという、一連の流れを説明してみた³⁾。講義の場がその「元陸軍施設」豊橋校舎でなく名古屋（三好）校舎であったことから、受講生にとっては実感のわかない点が多々あったであろうが、最初に第十五師団司令部として建設された大学記念館（旧本館、1998年文化庁より有形文化財に登録）の写真が今も愛知大学の“象徴”として本学全体の宣伝や案内に頻繁に使用されていることから、この補足は無駄なものではなかったと

信じたい。

また、「大学史」講義の最終回であることから、受講生の反応や考えをできる限り把握すべく、B5サイズ（片面印刷）の「講義アンケート」を作製して、講義開始前にレジュメとともに受講生に取ってもらい、終了時に無記名の形で提出してもらった。アンケートの設問は記述形式で、

問1 あなたが愛知大学を志望・受験し、合格・入学した際、この大学についてどのようなイメージを抱いていましたか。

問2 「大学史」の総合科目は今年度が初めてのものでありましたが、この講義をこれまで受講して何か感想・意見・要望はありますか。

の2問である。

アンケートの結果としては、当日70～80名ほどいた出席者（全履修者の半数強であるが、出席は取らなかったためあくまでも推測）中、回答（提出）者は36名と低率となったが、全体的な回答の傾向をあげてみれば、問1については「真面目」「就職に強い」「雰囲気がいい」「歴史がある」などの好意的なもの（受験・入学した時のものであるが）が多々見られた一方、「遠い」「田舎にある」「交通が不便」といった“がっかりした”ような意味合いでの批判的なもの（確かにこれらは“名古屋キャンパスの弱点”として当局に自覚されているようである）も目立った。

そして問2（一般的な設問ともいえるが）については、リレー講義の“宿命”であろう「講義の形がさまざまに要点がわかりづらかった」旨のものがやはりあったが、「シラバスの内容と違ったのは納得いかない」という不満の声がたいへん多い結果となってしまった⁴⁾。これは当初のシラバス『開講科目の紹介』に、評価方法として「レポートを予定している」と記したが（778頁）結局筆記試験に変更したことや、備考欄に「条件が整えば、豊橋校舎への『キャンパスツアー』を実施する予定」と記したが（同頁）実現できなかったことに対するものであるが、両者とも「多い人数

や「限られた時間」の面から無理があると判断して（関係者と相談の上、12月の講義時に伝達する形で）そうしたものの、多くの受講生を惑わす結果となったことは反省しなければならない。「あくまでも『予定』」と考えて事態を甘く見たことは（少なくとも私として）否めず、最後に“しっぺ返し”を受けたことを、今後の教訓として忘れてはなるまい（この次に述べる単位認定試験の際、「シラバスの変更」を改めて理由説明する形で陳謝したことを付言する）。

単位認定試験（2007. 1.26実施）について

このように、実施前にいささか混乱を招いてしまった単位認定試験であるが、再変更をすることなく、（履修者数の関係から）2教室に分けて行なった。教室の分け方および着席のさせ方は学籍番号による指定席制をとり、監督は大きい方（すなわちメイン）の教室は私が、小さい方（すなわちサブ）は村松幸廣経営学部教授が担当した⁵⁾。

実際の受験者は、総数137名中132名とほぼ全員となり、欠席した5名についても1名がのち追試験を受けることになった。試験の出題範囲は（本・追試とも）全講義からとし、客観・主観（論述）問題を併用したが、設問の主体は「愛知大学の歴史」として、受験者各人が思っていることを自由に述べられるような構成にした。問題の作成は、本講義の代表責任者である海老澤善一前学長担当副学長と、コーディネーター役の私とが分担した。ちなみに、物件の持込みは一切不可とした。

むろん、ここで各設問や採点経過を具体的に公表することはできないため、採点・評価の方針・基準および、実際の答案に見られた傾向を述べれば、前者では副学長の意向で「受験した者はできる限り通す」ことにしたことであり（よって今回の不合格者は、回答の仕方を根本的に誤認・誤解した者である）、いっぽう後者では、教育史についての“一般常識”にやや難が見られた（予想以上に正答率が低かった）ものの、本学の歩みにつ

いては、今回教示した代表的出来事を積極的にとらえ、考えてくれているのでは、と（あくまでも試験に際してのことであるが、少なくとも採点に携わった私として）うかがえたことである。

その「代表的出来事」とは、本講義でそれぞれ1回分かけて取りあげた「愛知大学事件」および「山岳部薬師岳遭難事故」のことであって、答案でふれた比率は他の出来事（たとえば、名古屋校舎の三好移転など）をはるかに上回るものであり、このふたつに受験者の関心が集中したと言っても過言ではない（愛大事件には男子学生が、薬師岳事故には女子学生が関心を寄せた傾向があったようである）。事件・事故の概要・経過・結果はそれぞれの担当者の報告を参照していただくとして、感想・意見の一例を文末の付表にまとめることで、各人の参考に処したい⁶⁾。

採点・評価の結果と度数分布としては、前述したように不合格者を極力出さない方針にしたため、F（不可、60点未満）は3名（全受験者の約2%）にとどまったが、S（特優、90点以上）にしても（客観問題の平均点の低さから）“該当者なし”となった。A・B・Cについては（以下、パーセンテージの末尾は四捨五入）、

A（優、80～89点）……21名（15.8%）

B（良、70～79点）……66名（49.6%）

C（可、60～69点）……43名（32.3%）

と、ほぼ1：3：2の割合となったが、A・B両者の合計数はこの講義の平均出席者数（これも前述したように推測であるが）に相当すると考えられることをあえて述べたい。すなわち「ほとんど出席しなくても単位はとれるが、たいていC。一通り出席して試験でそれなりに書けば、Aもとれる」との“評判”が学生の間で受け継がれれば、今後安易な形・気持ちでの履修の防止につながることもなる。そして試験の前に各受講生がレジメや『愛知大学小史』などを再確認することによって、本学の歩みの把握のみならず、節目節目の出来事に対して各人なりに踏み入った考察をしてもらえることを念じたい。“単純な書き写し”

を防ぐためにも、試験のスタイルとしては今後ともこの形を、私としては継続していくことを希望するものである。

初年度の一連の講義を終えての所感と、今後の課題

この講義の最後をしめくくるにあたって強調した“メッセージ”は、「受講生のみんなが卒業後、愛知大学を卒業したことを何かをきっかけに思い出した際、『自分がいた大学はこういうところだった』とはっきり認識できるようになってほしい」ということである。

大学史（自らの大学の歴史）を講義の科目に取りあげることについては、学内に反対意見も多いようであるが、いずれにせよ大学当局が「この大学はこのような輝かしい歴史を持っているのだから、入学できたことを感謝しなさい」と一方的に押しつけるようなものではあってはなるまい。（本意にせよ不本意にせよ）入学することになった学生一人一人が、その大学の歩みや特質を早めに知ること、早めに自分の居場所を確認して主体的な学生生活を送り前向きに卒業して、その後もその大学出身であることを意識できるようにすることの手助けとなるもの、それこそが「大学史」講義の意義・目的ではなかろうかということが、まずはコーディネーターとしての私の“第一印象”となった次第である。

先述した不手際もあったこのリレー講義であり、開講当初の混乱の防止、役割分担の明確化、映像資料の積極的な活用、マクロ的な歴史の中の位置づけなど、初年度の講義を一通り終えて問題・課題が次々と浮かび上がってきたところであり、愛知大学内に定着させるまでにはまだまだ紆余曲折がありそうである。しかしすでに『愛知大学小史』刊行に続き、大学史展示室も新しくなり、総合的な「愛知大学史」の構築、さらには啓蒙へと矢は放たれているのであり、豊橋・名古屋両校舎での「大学史」講義への各方面の理解と協力を

願うものである。

註

- 1) シンポジウムでの報告が省略された、2006年9月22日の「最初の講義」では「はじめに」として、愛知大学当局のホームページに掲載されている年表や、特集新聞記事（「この国のみそ 第7部 世界とナゴヤ 3 東亜同文書院」『中日新聞』2006.9.8付）などを掲載したレジュメから、愛知大学の歴史の大まかな流れや東亜同文書院との関係などを説明した。また、豊橋校舎の大学記念館など旧軍施設をロケに使用したNHK連続テレビ小説「純情きらり」の、該当シーン（2006.7.8放送回）のビデオ上映も行なった。
- 2) 武田学長のレジュメは、2006年度愛知大学後援会総会（名古屋支部・西三河支部の合同支部総会を兼ねて、2006年6月10日に愛知大学車道校舎で開催）での同学長の講演に使用されたものであり、私もこれを手本にしたレジュメを同年6月18日の岐阜支部総会、7月1日の九州支部総会、同月2日の中国・四国合同支部総会での担当講演にそれぞれ使用した。今回の私のレジュメは、その時のものが直接のものになっている。また、展示室用の説明文は要約の上、オープンした展示室のパネル文に使用されている。
- 3) これら旧軍施設の変遷について私は先に、愛知大学創立以後の分もあわせて同大学一般教育研究室の『一般教育論集』第31号（2006年）に「愛知大学豊

橋校舎旧軍施設の変遷」として紹介した。また、第十五師団廃止等の問題についての拙論として、「宇垣軍縮と“軍都・豊橋”」（『愛大史学』第4号、1995年）や、「宇垣軍縮での師団廃止発覚時における各“該当地”の動向」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第126集、2006年）などを発表した。

- 4) 2問とも“代表的かつ具体的な、辛口の”回答を述べていた一学生の文章を紹介して、このアンケートの回答例としたい（〔 〕はここでの補注）。
〈問1〉もっと近いところにあると思っていました。名古屋校舎なのに、名古屋市内に無いとは思いませんでした。あと正直、大学としては狭いと思いました。
〈問2〉科目として目のつけどころは良いと思いましたが、講師の方が回ごとに違っていたので、プリントの形式が統一されずに〔いて〕、板書を写すべきポイントがよくわからなかったです。
- 5) 試験時の教室の分割や指定席制の採用は、監督教員の指名ともども名古屋校舎教務課（当時）の決定によるものである。
- 6) 別表に掲げた回答例の選択にあたっては、評点（海老澤教授が判定）が高かったもののうち、自主的な感想・意見を前面に押し出していると感じられるものを基準とした。むろん、本意とはいささか異なる“お世辞”を述べた受験者もいるかもしれないが、薬師岳遭難事故については、山岳部一行の計画や（山小屋での）マナーにはやはり問題があったとの旨の、率直な批判的意見を述べた者も多く見られたことを付言しておきたい。

付表 大学史試験答案にみられた回答例

「愛大事件」に関する感想・意見

警察官2人が不法に校舎内に進入したということ。それ自体は非常に許し難いことである。法を守るべき、破ったものを捕らえるべき警察官が、自らそれらを犯して進入したこの事件は、私自身、愛知大学に入学して、この大学史の授業を受けるまでは全く知らなかった。しかし、年表には記載されることの少ない愛大事件だが、大学史という歴史的観点から眺めた場合、東大ポロ事件などと並んで、非常に大きな意味を持っていると思えた。

学生たちの持つ、何者にも侵されることのない、学ぶ権利というものを、同じく、捕らえる権利を持った警察官によって(……)奪われようとしたことは、そうした経験のない、悪い言い方をすれば、平和ボケをしている私たちには、現実味のない話かもしれない。しかし、当時からすれば、絶対的な権力という意味合いの強かった警官たちに立ち向かった愛大生の先輩たちの意志の強さは、私たちも見習うべきである。彼らのような偉大な先人たちによって、現在でも愛知大学の伝統と尊厳は、なお受け継がれている。(男性)

(……)ここで1番問題となった、「大学の自治権と警察権」についてとても考えさせられる事件であり、とても興味深かったです。深夜、警察官2名が大学の中へ侵入し、不審に思った生徒が捕える。このお互いのもつ権利のぶつかり合いがとても、難しく思えます。(……)確かに、私から見てみると、お互いが正当な意見を述べているように感じられます。不法に学内に入ることは法律上認められないことであり、しかし、生徒の被害意識の大きさ、どちらも問題でありえます。

でも、私がここで思うのは、なぜ生徒で逮捕される者がいたのか、逮捕されるような問題であったのか、これは少し気になりましたが、この事件の重要なことは他にあります。この事件に対して学校全体が立ち上がったこと、これこそこの事件の本質だと思います。学校と生徒の学問に対する精神が同じになった、これはとても素晴らしいことだと思います。学問を学ぶ側として、学ぶ自由をみだりに妨害されたらとてもつらいことです。それを大学が認識し、一緒に闘ったこと、これは、やはり当時の、大学と生徒の重要な関係が見えてくるような気がします。(……)この事件で警察との闘いより、大学のあり方という点で私はとても興味深く思いました。愛知大学の学生の一人として、この愛大事件を学び考えることができよかったですし、ぜひ、愛大生であればこの事件について知る機会が多くの人にあればなと思いました。(女性)

(……)最初に感じたことは、その当時の先生方や生徒が、本当に強い意志を持って、対処してきたのだと思いました。最近のニュースで、いじめ問題に教師も加わっていたという記事を目にしました。私はその記事を見て、教師という全ての存在に失望していました。しかし、愛知大学事件での、本間喜一学長の立派であり、尊敬に値する態度を聞いて、心の底から感心しました。戦後間もない警察の力は、今の私たちの想像をはるかに超える権力を持っていたと思います。それに対抗し、「大学」という存在意義を示した本間喜一学長をはじめとする愛知大学を正直にすごいと思います。学生が逮捕されるという事実は曲げることはできないことです。愛知大学事件には、それ以上の意味があったように思います。この事件を通して私は、大学の持つ意味を学ぶことができたと思います。そして、愛知大学という大学にとっても興味を持ちました。この気持ちをこれからの学習にいかしていきたいです。(男性)

愛大事件は「事実問題」「憲法問題」「誤想防衛行為」の3つのことから成り立っているが、その3つの問題を裁判で争うのに際して、学生と教員が力を合わせたということに驚いた。今では、学生と教員が力を合わせることもほとんどないのに、そんなことができたのはそれほど当時としては大きな問題であると思った。

また、そのような大変な事件を乗り越えてきたからこそ、愛知大学は世間的に評判が良くなったのではないかと考える。同様の事件が東京大学や、早稲田大学で起きていて、いずれも良い大学とされている。本当に良い大学というのは偏差値の高さではなく、それまでの歴史、その時に起こった問題に対して、どのように乗り越えてきたかということではないだろうか。そういう意味で愛大事件は、愛知大学が良い大学へ近づくための重要な意味があったと考える。(男性)

(……)この事件に関して自分の考えでは、(注：見回りをしていた)学生2人の対応はごく自然的なものではあるし、警官をしばったことはやりすぎにしても、逮捕されるほどの罪があるとはとうてい思えない。さらに、事実を隠した警察側もそうだが、この事件を学生側の一方的な暴力事件として扱った新聞が一番の問題ではないでしょうか。一般の人々は(自分もそうだが—原文—)、新聞やテレビなどのメディアの情報をうのみにしてしまう傾向がある。もちろん、この事件を新聞で見た人々は内容のままを信じてしまった訳で、愛知大学そのものの世間一般での見方までもが変わってしまったそうです。さらに裁判も約21年も続いて、愛知大学や当の学生たちまでずっと苦しむ結果になってしまった。当時の社会的情景や大学の考え方など、細かい部分は自分にはわかりませんが、やはり事実は正しく伝えなければならないと思いました。(男性)

(……)学生が警官を取り押さえた事は、罪にはならないと思います。むしろ不法で学内に侵入し、学生を取り乱させた警官側に非があると感じます。

しかし、そんな中で愛大の中には逮捕者が出ってしまったようです。連日、テレビなどのメディアは“大学側の暴力事件だ”と放送しました。そんな中学長の本間喜一氏は、“学生と自分達は、3親等内以上の家族のようなものだ”と言って、学生を警察に売るような事は決してしませんでした。その姿に私は深く感動しました。生徒の事よりも世間体を気にする教師が多い中で、本間先生は学生を守るために戦ってくださったのです。これを知って、本当に心が熱くなり、そんな人が創ったこの大学に入学できた喜びと嬉しさがあふれてきました。愛大事件は、愛大の歴史の中で風化させてはいけない事件だと思うし、学問の自由を語る上で重要なことではないかと感じました。

そんなすばらしい大学に入学できたので、これからも日々学問に励みたいと思います。(……)(女性)

愛大事件は高校の時の歴史の授業で軽く習ったことがありました。具体的に何をしたのかまでは習っていませんでしたので、愛大に入ってから、この授業で愛大事件をしっかり習い、色々考えさせられました。（……）この愛大事件では様々な問題が生じ、多くの人々が立ちあがり、大学の自治とは何かを追求していく大きな事件であったが、この事件を無駄にしてはならないと思う。そのためにも、現代の私たちが大学というところが、どんなところなのかを常に知っておき、大学というものの意義ということを考えなければならないと思う。それはとても重要なことだと私は思う。

私はこの事件を学び、大切なことを教えてもらいました。私がいつも通っている大学とは何か、真剣に考えさせられるものでありました。この事件は忘れてはならないものだと思つた。歴史に残る、大学の価値を求める、大きな事件であった。（女性）

愛大事件についてはいろいろ学びましたが、（……）非常に難しい問題であると思います。この事件だけ聞くとそれほど大きくない事件であるように初めは思っていました。プリントを読み進め授業を聞いている内に、これは最高裁までいった非常に大きな問題になったと分かり驚きました。でも逆に言えば、そこまで学生と先生が一体となって闘ったともいうことです。事件というと、あまり聞こえはよくないようですが、こういった事を皆で力を合わせて乗り越えてゆくことで、団結も生まれた出来事だと思います。過去のこのような様々な事件にも、すばらしい人々が闘ってきたこそ、今の愛知大学があるのだと思います。僕はこの授業をうけたことで、自分の大学に対しての愛着が生まれ、ますますこの大学が好きになりました。（……）（男性）

「薬師岳遭難事故」に関する感想・意見

この遭難の話を知り、今まで知らなかったのが、とても驚いた。13人の命をうばう自然のこわさも改めて実感した。

この授業で勉強した中で、この13名は地図と方位磁針も持っていかなかった、ということと、食べ残しのまま小屋を後にしたというのがとても印象的だった。同じ愛大生として、自然に対しての考えが低いことに少しがっかりです。（……）13名のうち2名は肉親によって発見されたという一連には心を打たれた。この事故でこんなにも多くの犠牲者を出してしまった愛知大学。これはものすごい責任である。無計画な13名の行為も許されるものではないが、これをもう一歩、あと少し早くどうにかして防ぐことはできなかったのかと、くやしい思いでいっぱいです。これからの愛知大学の中で、このようなことがもう二度と起こらないようにと思います。（……）私は、この遭難を聞いてとても心が痛みました。（女性）

山岳部の薬師岳遭難について、私はこの授業を受けるまで全く知りませんでした。しかし、当時の学長の「生命は地球より重い」という言葉に大変感銘をうけました。昨今では教師の身に余る事件等がさわがれていて、教師に対する尊敬の念なども薄れていると思います。そんな中で、学長が上記の発言や、「大学がつぶれても探す」ということを授業で聞き、こんなに学生のことを思っている方がいたのかと、感動に近い感情を抱きました。13名全員がお亡くなりになったと知った時にも、引責辞任するといういさぎよさを見せていらっやいます。この話を聞いて、愛知大学に入れて良かった、と私はますます思いました。

この事件を通してもう一つ感じたことは、大学、学生同士の連携です。愛知大学山岳部の13名が遭難した時、他大学の山岳部や東海地方からの救援がとても多かったと本で読みました。何事に関しても「我関せず」の態度を取るのとは簡単ですが、進んで危ない所へ行くなんてなかなかできなかったものではありません。このことから、困った時にお互い助け合うことの大切さや尊さを学べたのではないかと考えています。学長もこの助けが精神的な支えになったと思います。（女性）

（……）やはり時は残酷である。こんなにあわれなことが、たったプリント1点でおさまってしまうのだから。このプリントには書きあらわすことができない、被害者のドラマがあったに違いない。13人全員死亡、誰も事実をのべることができないというこの悲しさ。きつと、助けあい、励ましあい、救いあったに違いないだろう。仲間が息絶えていくとき、残された仲間は何を思うのだろう。そう考えたとき、息が苦しくて仕方がない。

（……）今度僕らも、仲間10人で旅行に行く。そのとき、もしものことがあったとき、この事件を聞いて、想像してしまった。／その想像というのはこうだ。仲間みんな助けあい、生きのびようとみんなで助けあうのだ。

きつと、山岳部13人はこのようなドラマがあったのだろう。生きて帰ってくることはできなかったが、彼らに悔いはないはずだ。共に助け合い、仲間を大切にしたらだ。／僕は、この事件から、仲間の大切さ、助け合いの素晴らしさのようなものを勉強させられたような気がした。（男性）

この大学史の講義の中で1番印象に残ったのは、山岳部薬師岳遭難のことでした。自分が今通っている愛知大学で過去にこのような大きな衝撃事故があるとは思っていませんでした。山岳部の13名の全員が亡くなってしまったこの事故は、とても多くの人々が関わり、また悲しんだのだと思う。

この遭難の時、13名は何を考えていたのだろうか。もしこの場に自分がいたらどうしていただろうか？

とても恐ろしくて想像できないが、おそらくただ黙りこみ、親や友人の事を考えていたと思う。また、13名の遺体もなかなか見つからず、その時の親の気持ちはどんなに不安だったのだろうか。中には遺体が見つからず、親が立ち上がり見つけた人もいた。（……）／このような事件をきいて、命の尊さや自然の恐ろしさを改めて考えさせられた。自分の大学の先輩がこうに命を落としていったこと、また、命について考えさせられた事を忘れてはならないと思いました。（男性）

私はこの薬師岳遭難事故を以前耳にした事があった。私の伯父が愛大の経営学科卒業、つまり私の先輩なので、私が愛大に入学したあと、伯父の家に母と報告しに行った時、話にその話題が出てきたのだ。この事故は伯父が入学するよりも前の事で、くわしい事は聞かなかったのだが、自分の通う大学の昔の生徒が、遭難事故にあって死亡しているなんて信じられないし、ひどい話だな、かわいそうにと思ったのを覚えている。

今回この大学史の授業でもっとこの事故のことをくわしく学んでみて、その気持ちは一層強まった。と同時に、いろいろな疑問も抱いた。なぜそんな危険な状況の薬師岳へ行くのを誰もとめなかったのか、反対意見は出なかったのか。その後すぐ山岳部は廃部になったのだろうか。その登山に行かなかった部員は？ 残された遺族は今??

授業の配布プリントの中に、遺体のうち二体は両親に発見されたとあったが、死んだ子供を“生きていてほしい”と希望を持ち捜しに行った先で発見するなんて、どんな悲痛な思いなのか私には想像がつかない。この事故のようなことがもう二度と起こらないよう、部活動においてやそれ以外においても、世間みんなが気に留めてほしいと思った。(女性)

私は、この事故について、大学史の講義中の先輩のお話で初めて事故自体について知ったという程無知でした。しかしこのお話を聞き、本間元学長が「無事に帰って来たら丸坊主にして、壇上から皆様に心配をかけたことを謝らせたい」とおっしゃったことを知り、本間先生のあたたかさ、まるで我が子を想うようなその深い愛情を感じました。言い方はきつつけけれど、生徒が帰ってくることを信じながら本当に親の様に、生徒1人1人を心配しているという気持ちが伝わってきました。確かに生徒の失態(後片付けをしない等—原文—)もあり、周りからバッシングを受けても仕方ない状況ではあり、沢山の意見が有りますが、助からないかもしれない、手遅れかもしれないという状況でも(……)バッシングを受けるような生徒であっても一生懸命捜す姿勢を聞いて、本当に大学側と学生側のつながりが強い大学なんだなあと感じました。生徒が生徒を心配する気持ち、教員が生徒を心配する気持ち、捜索を出来る限りやろうという動きの中で、それ等がいかに強いかという感じました。(……)大変残念な結果になってしまった事故でしたが、そこから見えてくる学校のあたたかさ、失礼ながら嬉しさを感じました。生徒と教員1人1人が1人の人間として付き合える、そんな関係を築いていたことが素晴らしいし、今は少しその関係が薄れている気もしますが、これからもそれらを受け継いでいけたら素敵だなと思いました。(女性)

薬師岳での愛知大学山岳部遭難事故は、本講義を通して初めて知りました。しかしこの事故の背景では、さまざまな人達が尽力していたということを知り、とても関心を持ちました。(……)この事故を機に山岳の怖さというもの改めて認知されたのではないかと思います。また、この事故の中で私が一番強く関心を持ったのが本間学長の言動です。本間学長は「たとえ資金が底を尽きても捜索活動は継続する」「人間の生命は地球よりも重い」という発言をし、大学そのものの在り方を示されたような気がします。また、「全員が無事に帰ったらみんなの前であまらせるつもりだったが、こうなってしまっは私が頭を丸めるしかない」と自ら責任を取って学長を辞任されました。ただ本間学長のすごいところは学長を辞任して、そのまま愛知大学を去るのではなく、一教授として大学に残り、愛知大学のために尽力されたということです。この本間学長の一貫した教育理念が、今日の愛知大学を創ってきたのではないかと私は思います。薬師岳での遭難事故を通じてさまざまな事が学べ、自分にとって得る物がとても大きかった講義だと感じました。(男性)

〔注〕 順不同 (答案の選定基準は本文の尾注参照)。

表記については、明らかな誤字・誤用以外は原文のままにしたが、薬師岳事故を「事件」と表記しているものは「事故」に統一した。